



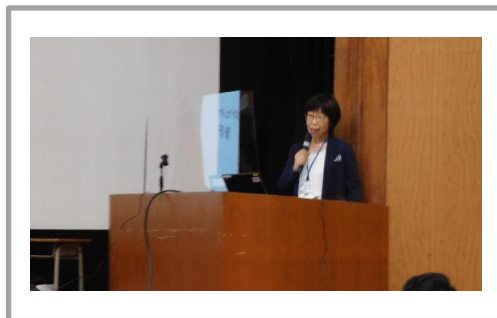
令和2年10月4日(日)、総合教育センターにおいて第5回かながわ教育学講座が開催されました。今回のテーマは「インクルーシブ教育」です。

第5回かながわ教育学講座「インクルーシブ教育」

<ねらい>神奈川県のインクルーシブ教育に関する取組について知り、教育のユニバーサルデザイン化について理解を深める。



向原俊幸 指導主事



奥野康子 専門員(スポーツセンター)

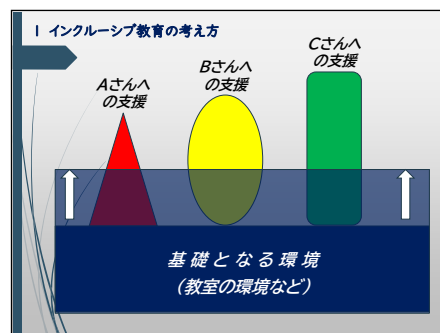
前半は、インクルーシブ教育の考え方や神奈川県の取組について講義がありました。

すべての人が互いに尊重し、認め合う「共生社会」を実現するためには、すべての人が共に学び共に育つ「インクルーシブ教育」の推進が求められます。また「インクルーシブ教育」を推進するためには、障害のある子どもが対象となる「特別支援教育」の推進が必要不可欠になります。

神奈川県では、障害のある子どもだけでなく、学校にいるすべての子どもを対象とした「支援教育」の理念を掲げており、みなさんが教員になった時には、目の前にいるすべての子どもたちに必要な支援を提供しなければなりません。子ども一人ひとりの実態を把握し、一人ひとりの支援について考えるには、子どもを、教員の視点である「困った子ども」ではなく、子どもの視点に立った「困っている子ども」として考える必要があります。

また、一人ひとりの支援について考えるには、その基礎となる環境(教室環境や教材・教具等)の整備についても考えなければなりません。

後半は、スポーツセンター・奥野康子専門員を講師に迎え、学校現場で出来ることとして、「授業のユニバーサルデザイン(UD)化」について講義がありました。エクササイズ「単語でポン」を通して、受講者は「間違えても温かい笑いが起こるような雰囲気」が大切である」ということを実感しました。神奈川の支援教育の理念が授業の



UD化にも結び付いており、「誰でも公平に利用できること」「使い方が簡単ですぐ分かること」などの「UDの7原則」が、生活の様々な場面ですでに実現されているということ、具体例を示しながら説明がありました。

授業のUD化を実現するためには、失敗してもからかわれない「人的環境」、物の定位置を決めておくなどの「場の構造化」、スケジュールを示して行動の見通しを持たせる「時間の構造化」といった環境の整備が不可欠です。そして、授業のねらいや活動を絞る「焦点化」、子どもの実態を見て目に見える形で示す「視覚化」、話し合い活動を子どもの特性に応じて組織化する「共有化」という3つの視点を持って授業づくりを行うことも大切になります。受講者たちにとって、子どもが授業で楽しく学び、子どもの表情が輝く瞬間をつくることのできるように、教員として心掛けることを考える機会となりました。

グループ活動

<ねらい>事例検討を通して、一人ひとりの子どもが抱える課題への対応と、できるだけ全ての子どもが同じ場で共に育つために必要なことを考える。

グループ活動では、事例検討を通して子どもの困っていることを理解し、必要な支援についてウェビングの手法を用いて考えました。「ウェブ」とはクモの巣(広辞苑より)という意味です。つながりのあるものを線で結びながら、新たな意見などを書き込んで網のように広がっていくため、考えを広げる時によく使われる手法です。

事例に出てくる子どもが「困っていること」を書き出し、「どのように支援していけばよいのか」を考え、模造紙にまとめていきました。現場の経験のない受講者にとっては、子どもの「困っていること」を具体的に考えることは、難しかったかもしれません。しかし、グループ担当者から助言をもらいながら、支援の工夫についても考えていました。

また、支援の工夫については困っている子どもだけでなく、他の子どもに対しても有効なものもあります。できるだけ全ての子どもが同じ場で共に学び共に育つための工夫として、班で意欲的に協議する様子が見られました。

